

其間実に三十年母校の盛運を致せる洵に氏の力に待つもの多く其功勞を記念する為め學員中より資金を募集して記念品を贈呈し且つ記念会を開催する為め実行委員を挙げて夫夫準備中なりしか去る十一月二十三日を卜し愈其記念会を開催し記念品として佐藤醇吉氏の執筆に係る油絵肖像画二面並に金杯一組を贈呈し盛宴を張りたり当日は午後正一時より中央大学大講堂に於て先づ記念品贈呈式を挙行したるか式場の正面に贈呈すへき油絵を掲げ定刻一同の着席するや田中文藏氏登壇開会の挨拶を兼ね會長の推薦を自分に一任せられ度旨を満場に諮りたるに一同拍手を以て之に賛したれば同氏は直に三宅碩夫氏を推薦し三宅氏は決諾せられて會長席に就かれ先づ堀江專一郎博士を麾けは同氏は登壇して左の如く記念会の経過報告を為し

母校今日の隆盛は氏の献身的努力に負ふ所甚た大なるを以て聊感謝の意を表し且其功績を記念せんか為め有志の間に記念会開催の議起りたるは本年春のことにして先づ

一 本年四月二十五日本学に於て發起準備会とも称すへきものを開き花井博士外八名出席して本会を佐藤幹事在职三十年記念会と命名し大体の実行方法を定むること左の如し

(一) 祝賀会を開くこと

(二) 写真二面を作り一面を佐藤氏に贈呈し一面を本学に附すること

(三) 金杯一組を贈呈すること

(四) 右実行の為め發起人の範圍を広め実行委員を定め寄附金を募集(本学出身者より)すること

691 佐藤正之氏中央大学在職三十年記念会

〔『法学新報』第32卷1(361)号 大正11年1月1日〕

○佐藤正之氏中央大学在職三十年記念会 昨年四月以来中央大学學員諸氏は既報の如く佐藤正之氏か明治二十二年以来母校に在勤せられ名利を逐はず聞達を求めす一意専心以て今日に及び

- 一 五月十一日学員二百九十名に發起人たらんことを懇囑し
- 一 六月二日本学に發起人会を開き

実行方法は第一次会決定の通りとし実行委員十五名を定め即時寄附金の募集を始め

- 一 九月十三日本学に於て実行委員会を開き左の諸項を決定し

(一) 写真を油絵に改め菊池奥田両先生の油絵筆者佐藤氏に託すること

(二) 金杯の様式は三組にて杯の外側に「恭祝中央大学幹事佐藤正之君在職三十年 中央大学学員同人」の文字を、杯中に佐藤家定紋を刻し函の表に「恭祝」「年月日」「中央大学学員同人」の文字を委員長自ら揮毫し且つ台を附すること

(三) 祝賀会開会の日時は十一月二十三日(新嘗祭) 午後一時とすること

(四) 正賓の外本学理事及び監事を招待すること

(五) 祝賀会の案内は寄附者全部とすること

(六) 実行委員長に三宅碩夫氏を推薦すること(承諾を得)

- 一 本月十四日最後の実行委員会を本学に開き左の諸点を決定す

(一) 祝賀会の順序

(二) 寄附ありし十九名の講師を招待すること

(三) 本学職員全部を招待すること

(四) 使用人に酒肴料を給与すること

- (五) 寄附金総額の処分を実行委員に一任せられんことを諮ること

次に寄附金の状況を附言すれば

収入 金六千二百十五円也寄附者約七百名一内講師十九名
支出 金約三千円也追て細目を発表すへし

次に花井卓藏博士は謹厳に左の式辞を述べられ

中央大学幹事佐藤正之君在職三十年記念祝賀会に於て式辞を述べたるは私の最も光榮とする所であります佐藤君は卒業以来心力を傾倒して母校に貢献せられ三十年一日の如くでありました増島、菊池、岡村、奥田、岡野の各学長を補佐せられ多大の成績を挙げられたることは諸君御承知の通りであります我我は母校の事務室に君在りと想ひ到る毎に無限の信賴を齎らし又恒久の安心を得たのであります抑も君は如何なる人であるか君か三十年間の歴史は至誠一貫の四字を以て終始せられて居るのであります今日は君の三十年の効勞(マカ)に対し感謝の意を表せんか為め君を招待し記念として君の肖像画二面、金盃一組を贈呈して敬意を致し併せて一夕の驩を共にせんとするのであります君の肖像には君の麗しき真心を写すに勉めました君の真心は永久に母校に留まりて其興隆を護つて貰いたいのてあります又金盃には我我の真心を盛りました此真心を酌んで愉快に酔つて戴きたいのであります質実剛健の学風は誠心誠意に依りて達成せらるるものであります君か三十年の久しき母校の事務室にあられしことは真に中央大学の誇りてあります至誠神を感す況んや人や人をや嗚呼至誠一貫の人佐藤正

之君之を以て式辞と致します

右了るや会長は佐藤氏を招きたれば悠揚迫らざる態度もて偉軀を壇上に運へは満堂破るるか如き拍手を以て之を迎へ木下謙次郎君より記念品を贈呈す之に続て佐藤氏は左の如く懇切なる答辞を述べられたり

私か母校たる本大学に勤務することか三十余年に相成りましたので學員諸君より今日此盛大なる会を御開催の上貴重なる記念品を御恵与下さいまして誠に難有私としては寧ろ衷心恐懼に堪へん所でございます

私の始めて此校に御採用に爲りましたのは明治二十二年一月でございましたか二十五年十二月に免職になりました然るに翌年二月突然松野幹事か御病死に爲り奥田先生か幹事御襲任に付きまして花井博士を介して是非旧巢に戻る様にとの御懇命で復ひ勤務することに相成りました此際には私も未だ若かつたので種種我儘を申して奥田先生にも花井博士にも御手数を掛けましたか是から致しまして以御蔭引続き今日に迫ひましたのでございます願みれば三十余年間事ある毎に遣り損ひのみを繰り返し居りまして常に自分の非才をのみ嘆し幸に皆様のご同情により僅かに糊塗し来つたに過ぎないので平素唯だ恐縮して居る次第でございますから従つて功勞などと云ふことは思も奇らんことでございます若しも私の仕事で些かにも学校の爲めに観るべき事跡があつたと致しますれば是れは故の菊池学長、奥田学長及岡野現学長の御差圖か其宜しきを得た結果に外ならないのでございます

簡様な私か何故に今回の御催を辞退せずに御請をしたかと申せば私の如き者を御見棄なく御苦心の上三十余年間御使用下さつたと云ふことは菊池先生、奥田先生、岡野先生の偉大なる御高德の一つてあろうと考へます然るに私か勝手に辞退致せば此三先生の御恩誼を没却することに爲りませんか次には私の如き愚鈍なる者でも多年正心誠意に勤務致せば皆様より斯の如き御寵遇を受けると云ふ好先例を示していただくことは唯今事務所に居らるる俊才諸君か今後母校の爲めに御尽瘁下さるる上に如何に心強く感ぜらるるか蓋し皆様の御思召も亦此辺にもあることと察し上げますと決して自分のみに関する事ではないと相考へまして私に取りては實に分に通ぐる即ち過分のこととは乍存難有御請をした次第でございます今日皆様か盛大なる此会を御開催下さいましたことは私の身に余る幸栄と存し又此記念品は家宝とし後に伝へまして永久に皆様の御芳情を感謝致しまする次第でございます茲に謹て御礼を申述べます

斯くて各方面代表者の祝辞に移り先づ岡野中央大学学長は左の如く

本日佐藤正之君公生活の揺籃たり其の中心たる我中央大学に於て同君在職三十年記念会を行はるるに当りまして本学当局者の一員として一言の祝辞を呈しまするは私の義務であると思ひます私の阪本武治氏として同君を知りたるは明治二十一年でありますか同君御経歴の一端を申上ければ同二十一年英吉利法律学校を御卒業翌二十二年一月編集員として講義の筆

記及編纂の事に当られまして私の怪けな講義も蓋し其筆記を担当せられたかと存します二十五十二月其の職を辞せられましたか二十六年故奥田博士か故松野貞一郎君の後を襲ふて幹事と為らるるに及びまして花井博士か主として幹旋の勞を執られ再び教務掛の職に就かれ同年幹事と為られ引続き本年に至り五月推されて理事の任に膺らるることと為りました我中央大学と同君との關係は唯今申述べました通りでありまして最も古く最も深く世間其の類例を見ませぬ世に彼は活字引なりと申して其経歴の極めて古く事務の変遷を暗し又職務に精通することを形容致しますか佐藤君は我中央大学の活字引であると申す丈では決して真相を穿ちたりとは申し難く如何なる辭を以てしても充分に形容することは出来ませぬ私は試に斯の如く申して見ます佐藤君の経歴は則ち本学の沿革であつて同君は中央大学なり否英吉利法律学校なり東京法学院なり東京法学院大学なり中央大学なり而して本学は亦佐藤君なりと斯く申しても決して過當の言てはありませぬ同君と本学とは真に同身一体でありまして本学の長き間に於ける順逆の境遇は是共に同君の境遇を示すものであります佐藤君は三十有余年名利聞達の外に超然として一意専心本学の為めに全力を傾倒せられました本学としては同君に対して感謝を表するの辭はありませぬ

私は敢て佐藤君の為人を評するてはありませぬか性格極めて円満であつて些の圭角なく體質強健にして寢食を忘れ校務に鞅掌せられ本学経営の中心として事細大となく一切万事身に

引受けて本学本位に画策せられ又本学出身者諸君を知り汎く能く交際を重ね本学との連鎖と為りて意思の疎通を謀られ理事は数次更迭せるも佐藤君は終始渝る所なく其の特性を發揮せらる同君の人格健体忠実犠牲的精神は本学の發展に資する所甚大であつて本学今日の盛況を致せるは同君大に与て力あるは苟も本学に關係ある者の齊しく認むる所であります

以上は有の儘の事實を叙したるのであります決して同君に対して諛言を呈するに非ず徒らに誇張の言を口にするは私の尤も好まざる所であります佐藤君の功勞は容易に悉し難しと存しますか多くは言ふは却て同君に於て御迷惑と御推察致しますから此辺に止めます唯一言私の希望を申述べたきは佐藤君と本学との離るへからざる關係は今後も仍之を繼續して同君の歴史をして本学の歴史たらしめんことを切に望む次第であります

私の申述べましたるは或は祝辭の体を為さざるへし乍去本学の佐藤君に対する感謝の辭を以て祝辭に代へます次第であります

馬場愿治博士は中央大学学員会理事長として左の如く

回顧すれば我中央大学の前前身たる英吉利法律学校は實に今より三十七年前即明治十八年に創設せられました而して本日の祝賀会の主人公たる佐藤正之君は本学最初の学生にして明治二十一年七月を以て其業を卒られたのであります尤も君に先ちて本学を卒業せられた者はありませんが右は第二級若くは第三級に編入せられたもので第一級より就学し滿三年

の全課程を履み卒業せられたる者は君等を以て矯矢(マサ)とするのであります佐藤君は其卒業の翌年即明治二十二年一月初めて本学職員の仕事に就き爾来実に三十三年間最初は編輯員とし間もなく幹事として今日は理事の要職に当り一意専心全力を挙げて本学の為め引続き努力勉勵せられつつあつたのであります尤も君は明治二十五年十二月一たび其職を退かれたることあるも其翌年二月復職せられたので三十三年間僅に二ヶ月の中断あるに過ぎませぬ君は何故に一たび其職を退きたりやと云ふと当時本学に於て冗員を淘汰し経費を節約するの必要がありましたか斯の如き場合には無能の者を淘汰するを以て普通と為すも本学に於ては之と正反対の方針を採り無能の者は他に就職し糊口の途を得るに困難なるも有為の人は何処に行くも容易に就職するを得て糊口に窮するか如き憂なきか故に先以て多数の中尤も能力に富める君の如きものを犠牲と為したのであります然るに君か其職を退き僅かに一二月を経過し早くも君の如き才と識とを具備し事務に熱心なる人の手腕を仮るに非されは到底学校経営を完ふすること能はざるを覺り本学は強て君の復職を求め幹事の要職に就かしめた次第であつて君の復職の時より君の在職年月を算ふるも今正に三十年に及んで居ります是れ本日此の祝賀会の開催せられたる所以であります

君か在职三十年の間校舎は数回祝融の災に罹り菊池岡村奥田三学長逝去の厄に遇ひ時に或は校運の丕塞に傾きたることもありましたが君は常に能く各学長理事を補佐し幾多の災厄困

難を凌ぎ遂に今日の如き校運の益々隆盛に赴くを視るに至りましたのは君の努力の賜と謂ふも固より過言でありませぬ我輩の窃に君に敬服するは歴代の学長理事中には頗る偏狭の者あり頑固の者あり氣六个敷い者あり理屈家もありました然るに君は多年此等の学長理事の下に在つて其職を執り未だ曾て一回たも相互に衝突し相互に感情を害したことなく常に能く其職責を尽し好成績を挙げられたることであります是れ固より君の資性温良にして恭謙、愿誠にして真摯、円通にして無礙の致す所なるも抑も精神修養の宜きを得るに非されは何ぞ克く此の如くなることを得んやてあります

更に一層我輩か君に敬服し感謝して措かざるものかあります方今世界は物質文明に偏倚し物質的利益の存する所は蟻の甘きに就き蠅の腥を追ふか如くて只利にのみ走り利を得る為めには苟も法律に触れざる限り何事をも為しかねざるは社会の上流下流を通し滔滔として皆然りと云ふも過言でない此の如き時勢に於て君は三十年間本学に薄給に甘し一意先進本学の為め畢生の力を挙げて尽されたことであります君の同窓並後輩て或は一世に名声を馳せ或は巨万の富を得て一世を睥睨するものも尠なからず而して君の才識と努力とを以てすれば之を得るに難からざるに君は毫も之を顧みず本学の為其畢生の力を尽されつつあるは我輩の大に敬服し称讚の辞と感謝の意を呈せざらんと欲するも禁すること能はざる所であります此の如きは世上層層物質文明にのみ憧かるる者の断して為し能はざる所て独り世俗に超越し真に天命と天職の何物たるをい

解する者に於てのみ之を為すことを得るのである。於是乎我輩は深く疑ふ否深く信せんと欲する者である。天は本学を經營せしむる為に特に君を此世に降誕せしめたものであることを宜なる哉。君は本学の經營を以て其天職と爲し一切他を顧みず本学の爲三十年一日の如く毫も倦怠の色なく勉勵努力せられ本学の佐藤か佐藤の本学か君と本学とは不二一体なりと謂ふの世評あるは決して偶然でないのであります。斃而後已矣とは支那古来の教訓なるも我神典の教に依れば人の事業は斃れて後已むものてなく人は死後と雖幽界に在りて常に現界の事業を助成しつつあるものである。本学は君と不二一体離る可からざる關係に在り君よ君か存命中は勿論百年の後に至り昇天せらるるも尚本学の事業を助成せられんことを我輩は切望の至に堪へませぬ。明治天皇の御製に「まき柱たてし心を動かすな世には嵐の吹きすさふとも」君は真に此の御製の教訓を實行履踐せられたるものと謂ふべきであります。

余は中央大学学員会を代表して茲に謹みて本学理事佐藤正之君の在職三十年を祝し併せて君か将来益々自愛加餐して本学の爲め努力せられんことを切望致します。

稲田周之助氏は中央大学教授たる出身者を代表して左の如く今日の盛式に際して小生か中央大学出身者にして中央大学教員たる者の一人として此に参加いたしますることは無上の光榮と存じます。

佐藤君は単に其在職の歲月か永いと云ふばかりでは無く其の身を本大学に捧けて努力尽瘁せられましたから其功績の大な

ることは今更ら申上くるまでもなく小生共教員としてお世話になりまする者は独り学校のことで御世話になるはかりては無く日々相親みまするところから遂に一身一家の私事に至るまで御厄介をかける次第であつて如何なる御面倒を持ち込みましても佐藤君は常に必ず懇切に御世話くださるので小生共は大満足且大に感謝して居るのであります(り脱)。小生共の感謝の意は到底言語を以て云ひ尽くすことはできません。特に小生の訥弁を以てしては全く不可能であります。只此に満腔の熱誠を以て謝恩の意を表するのみであります。且小生共は佐藤君の今後益々御健勝にわたらせられて小生ともは永く今日の如く御世話になりたいと云ふことを切に希望いたします。

濱田國松氏は出身代議士を代表して左の如く

私も本大学出身の代議士の側を代表して爰に祝辞を述べたるの光榮を有ちます。佐藤正之君か既往三十年一日の如く本大学の爲め拮据尽瘁せられる偉功に対し本日表彰会を催すに立ち至たる事は啻に本大学の爲に喜ぶべき事柄なる而已ならず国家教育上の見地よりして慶賀すべき事ならんと思料致します。蓋し一國の興亡は文化の盛衰に繋り文化の盛衰は教育の振否に依る事多言を要せず而かも教育の振否は其の機關の整備に待つべき事勿論なれば佐藤君の如き篤厚真摯にして而かも校務統率上抜群の技倆を有せらるる人士を本大学に得たる事は是を國家教育上の慶事と称して敢て不可ならざるへしと考へまして私は此の大なる意味に於て佐藤君に深厚の敬意と感謝を表します。是を以て御挨拶と致します。

ト部喜太郎氏は出身弁護士を代表して左の如く

中央大学幹事は大学に関する一切の事務を処理し且職務の範圍甚だ広く学生との関係、講師との関係、職員との関係、學員との関係、一般世間との関係等に涉り幹事の職務を全ふるには常に此多方面の信任を要し実に難職であります

然るに佐藤君か一身上の都合を以て辞意を漏らしたとかありましたか中央大学は佐藤君の去ることを許さず佐藤君も亦一身の利害の為に去ることを敢てせず三十年間の永きに涉り一身を中央大学に捧ぐるに至つたは当世稀に見るの美事佐藤君か中央大学に尽さるる誠実の志か中央大学をして佐藤君を信任せしめ中央大学の信任か佐藤君を感動せしめ佐藤君と中央大学との間には士君子の道即知遇信任に感して利害の打算を捨て一身を中央大学の犠牲に供するの一大決心を為したるものと謂はなければなりません佐藤君と中央大学との関係は士君子の道を示す最も貴ふべき活きたる教訓であります此意義に於て今日の記念会は佐藤君の為に祝すべく又中央大学の為にも大に祝すへきて佐藤君は今日理事の要職に在り中央大学の為に益々力を致されんことを切望し佐藤君の自愛加餐を祈る次第であります

河野秀雄^(ママ)は出身行政部員を代表して左の如く

本日佐藤君の記念祝賀会に当りまして行政部の代表として茲に祝辞を述ふるは甚だ光榮とする所であります佐藤君か至誠一貫三十年一日の如く本学の為に尽瘁せられまして今日の隆盛を見るに至りましたのは寔に慶賀に堪へざる所であつて謹

みて過去の勲績に対し感謝の意を表する次第であります凡そ世の中に於て事業成功の蹟を觀まするのに必ずや裏面に於て隠れたる幫助者の存在せることを忘れてはなりません本学か現今學員の數に於て約一万を算し学徒の數に於て五千に上る盛況を呈しまして私立大学中優越なる地位を占むる所以のものゝは歴代の学長理事其人を以て尊敬すべき学徳と卓越せる力量手腕に困りまするのは勿論のことでありますけれども一面内部に於て佐藤君か己を忘れ献身的に校務の為に努力せられたる効亦多きに居るものと確信を致すのであります今日本学は校運隆盛でありまして誠に順境でありますけれども翻て過去数十年の歴史を顧みましたならば其間艱難災厄頻りに臻りしことかありまして之か経営は尋常一様の苦みては無かつたことと想像をいたします近き歴史に於て其一を申し上げますならば今を距つる数年前当時の学長奥田先生は市長として市制刷新の為に殉せられ我等同人の臉辺の涙乾かざるに日夕親しみたる母校は忽然として火災の厄に遭遇致しまして貴重な圖書と共に全部烏有に歸したのであります当時我等同人は其焼跡に立ち悵然として奥田学長の葬列に對したるのであります此無限の哀愁は今尚記憶に新なる所であります是等の間に立ちまして佐藤君は尚ほ理事者を輔けて一切の処理に當られ善後の対策と共に禍を転ずるの方法を講せられたる如きは本学歴史に特筆すべき顯著なる事実と存します而して又佐藤君に對し嘆服すべきは名利に恬淡なるの点であります同君と時を同ふして学窓を出てられたる友人は政治に志せしもの

は政党の領袖となり実業に志せしものは斯界の重鎮となつて居る人人か少くはないのであります若し君にして志を移せしならば是等諸君と駢行すること決して難からざりしことであらうと思ひます然るに美名を欲せず利益を求めず一意専心本学の事に従はれ毫も他を顧みざりしか如きは本学に殉ずるの公念か熾てありまして犠牲の精神に依るに非れば到底出来得る次第ではないと存するのであります更に佐藤君の事蹟に対し一言を申加へたきは本学と學員との關係に於て其連鎖たるの点であります本学か過去四十年に於て産出せる學員無慮一萬の内に於きまして同君は其重なる人人の凡てを知悉せられて居るのであります其消息に通ずるのみならず其人の長所短所は勿論明所暗所に至るまで通曉せられて居るのであります従て此間調和を保ち其消息を審にすることか出来るのでありますまして無形の間相互情意の疎通を見ることか出来るのであります私共か学校を訪問するとき佐藤君か不在欠勤の場合に於ては誠に物足らぬ感しを致しますことは諸君も定めて御同感の事と存します同君を訪ねて徐に學員の消息さては本学の盛況を知り卒業生の優秀を説かるるときにおきまして窃に快心の笑みを禁し能はぬのであります誠に先程岡野学長の御話の如く学校と佐藤君とは一体不二であります形影相伴ふ如くであります何卒加餐自重せられ篤実円満なる人格と太く逞しき骨力とを以て本学に終始せられんことを切に希望して已まぬ次第であります

又佐藤氏と同郷なる柵瀬軍之佐氏は左の如く述へられたり

私は佐藤君と同郷後輩一人でありまして年少の頃は同一学窓に学ひ其後又佐藤君の跡を追ふて長亭短亭一百十余里雲路遙かに十有三日を費し東京に着したる後も早速佐藤君を訪問して其学ふ可き針路に就き懇切なる指導を受け又は佐藤君と同一学窓たる本校に身を投ずるに至りたる極めて深き因縁を有する者であります

佐藤君は卒業後直ちに母校の教務に当る人となり英吉利法律学校の昔しより東京法学院となり中央大学となるに至るまで只た専心一意側目も振らず孜孜として其発展隆盛の道を講ずるに努力せられ其間更らに聞達を求めす名利を趁はず歴代の学長を補佐して三十余年間多大の心血を濺かれたる其勲績功業は慥かに没す可らざるものありと信する者であります今日中央大学か私学界の一大權威として斬然一頭地を抜くに至りたるは偶然にあらずと思ふ者であります

私は本日此盛大なる式典の挙行に当り親しく其実況を目撃して人一倍に欣快を覚へ極めて片身広きを感じる者であります故に此記念会を計画せられ具体化せられ且つ本日朝野多数名流の前に此式典を挙行せられたる學員諸君に対し佐藤君の後輩の一人として爰に郷友を代表し深厚なる感謝の意を捧ぐる者であります

唯今岡野学長は申されました中央大学は佐藤君たり佐藤君は中央大学たり其間殆んど分つへからすと言極めて簡單でありまするか意味は極めて深長であつて即ち佐藤君に対しては全く金鷄勲章功一級に値ひすべく佐藤君三十年の志初めて爰に

酬ひられたりと申しても過言でないと思し佐藤君の御満足無
かしと拝察して余りある次第であります

願くは佐藤君に於かれては今後も相変らず母校の爲めに献替
せられ此上有終の美をなさん事に留意あらんことを願ひます
終りに臨み佐藤君の益々加餐自愛せられて其前途の長へに多
幸多福ならんことを切望して止まらざる者であります

尚ほ林頼三郎博士は出身司法部員を、指田義雄氏は出身実業家
を、又梅原喜太郎氏は出身記者を代表して孰れも佐藤氏の高風
を称揚して祝辞に代へられ最後に天野徳也氏は中央大学職員代
表として左の祝辞を朗読せらる

大凡物其実内に充ちて英華外に溢れざるなく今や百穀新に熟
して菊花馨はし此時に当り我佐藤先生今日の盛典に逢ふ豈に
夫れ偶然ならんや

顧ふに中央大学創立以来校舎祝融の災に罹ること二、学長其
人の更迭すること四、若し夫れ校運の盛衰消長に至りては転
変頗る多かりき然るに此間毫末の変改なきもの二ありて存す
其一は我校風たること曷そ言を待たん其二は即ち佐藤先生か
母校の隆替に関せず固く高節を持して今日に至られたる至誠
なりと謂ふを憚らず而して今や校運鬱興未曾有の盛況に在り
吾等後輩亦歡喜の情に勝へず況や三十年來母校と終始せられ
たる先生に於てをや往時を追想して感慨無量なると共に欣快
措く能はざるものあらん歟而も吾吾乏を中央大学に承け先生
指導の下に校務に従事する者に於ては斯の歡喜は正に是れ家
庭に於ける歡喜にして他人を祝すると豈に同日の談ならんや

是を以て本日の盛典は吾等に取りては他に比して一層の喜
悦、一層の快樂を覚ゆる所以なり

且又之を思ふ先生三十年の大努力は實に是れ吾等に対する活
ける教訓ならずや斯の教訓たる本日の盛典に当り愈々深刻に
愈々痛切に感銘する所にして斯の記念式たる洵に吾等に対し
て奮激を与ふる一大快挙なりと謂ふへし

本日は吾等職員寵招を忝うし斯の意義深き盛典に列して優待
を蒙むる何の光榮か之に加へん感激の至りに堪へず爰に併せ
て謝意を表す

大正十年十一月二十三日 中央大学職員代表 天野徳也

右にて式を終り新館第三十一号室にて余興を開く貞山の講談、
圓右の落語何れも快哉声裏に演了し主客茲に「ベルモット」と
余興とに酔ひ満場既に和氣横溢す斯くして五時半に至り其準備
成るや再び大講堂に復して盛んなる記念宴を開くさすかに広き
大講堂も狭きを告ぐる盛況にて酒漸く酣なる頃佐藤氏は起つて
これより頂戴の金杯を開き先づ自ら酌んで各位に順次廻はすこ
ととすへしと告げられ紅白其他五色の酒は満場の英氣を振はし
め談笑の声四方に喧しく稍々ありて三宅会長起つて「テーブ
ル、スピーチ」を要請し第一の指名権を得て牧野充安氏を奨め
それより次第に指名することと為り野村嘉六、濱田國松、高野
金重、川手忠義、吉田久、福田市太郎諸氏交々起て各種の感想
談又は追憶談を試みられ和氣霽靄にして快絶響るふるに物なく
何時果つへしとも思はれさりしか其更の漸く深くるや花井博士
の発声にて佐藤君万歳を三唱し次で佐藤氏の発声にて中央大学

の方歳を三唱し別室に移り各自思ひ思ひの席を占めて欲談に余念なかりしか新旧学員何れも学生時代と佐藤氏との關係を回想しつつ其漸く散会したるは夜十時を過く尚ほ三宅會長を始めとし十数氏は数台の自働車に分乘して佐藤氏を自邸に送り茲に復た縦断に花を咲かせ佐藤家の万歳を唱へて帰路に就きたるは十二時に垂んとす因に当日小澤鴻房氏は「中央大学幹事佐藤先生在職三十年賀筵賦呈」と題して左の漢詩を寄せられたり

菊花燦々 映於朝陽 良辰茲卜 華筵大張

多士雲集 鸞声瑤々 陳賀猷頌 堂之中央

先生捩牀 執黃金觴 容姿温雅 風神高昂

処嶮治難 譽馳名揚 至誠奉職 卅載之長

濟国惟人 毓才惟庠 於戲若人 其德永光

美酒似泉 滿樽而香 佳肴如阜 積器穰々

賓主欣然 且飲且嘗 樂音鏗爾 無蹈翔翱

夜以繼晷 蘭燭煌々 逸興陶々 懽呼汪々

以賀先生 併庠運昌 德業千秋 流芳無彊

尚ほ各地方の学員諸氏より祝電を寄せられたる向も鮮からず当日出席せられたるは石原毛登馬、岩瀬修治、井上豊太郎、石井謹吾、稻田周之助、岩田匡彦、石井清、犬養駒太郎、伊澤芳造、飯沼兎一郎、岩間日出男、伊藤俊、岩淵秀男、岩崎眞、葉山萬次郎、花本福次郎、林頼三郎、濱田國松、馬場豊三郎、春木一郎、花井卓藏、馬場恩治、馬場鉄一、波多野重太郎、西田富衛、新田法教、堀竹雄、堀江専一郎、細野繁勝、保坂榮之丞、堀川寅次郎、徳田直吉、豊島良昌、遠山茂、常田力、千葉

彦治、小栗盛太郎、小野實雄、奥田剛郎、小山田實、大内省三郎、大松直重、及川故作、小澤鴻房、岡田末次、渡邊福三郎、脇田勇、早稻田逸郎、金井延、加藤右二、笠神志都延、梶屋貞、梶尾圓平、川手忠義、貝塚徳之助、加瀬福逸、川井金一郎、河野秀男、加藤萬四郎、神田常吉、片山義勝、辻本友次郎、長島八郎、中澤英夫、中口末松、七邊格太郎、中井雅夫、中野安次郎、梅原喜太郎、宇都宮七五、卜部喜太郎、内田清吉、野村嘉六、野口源伍、野村永助、窪谷逸次郎、國貞善一、吉田久、吉田金司、田邊喜一、田中文藏、田村芳造、武田明、高窪喜八郎、高木三郎、高野金重、田中清文、田中重城、土屋忠右衛門、工藤武重、矢澤榮三、山田辰之進、山浦橘馬、柳田宗一郎、安田壽也、柳澤慎之助、山田三郎、山崎重雄、松波仁一郎、前田義胤、丸山熊八、松澤卓規、松代六郎、牧野充安、正岡義光、松岡高明、松隈昌隆、松澤玨三、深田鶴松、藤田幸太郎、福田市太郎、後藤傳兵衛、小出巧、小松林藏、近藤吉三郎、海老原重、江草重忠、寺島由松、朝比奈孝一、安達元之助、新井要太郎、安藤静、杉山米堂、秋山清、秋本豊之進、阿部文二郎、天野徳也、柵瀬軍之佐、佐藤健三、佐藤章次、坂本萬作、指田義雄、佐藤金吾、木下謙次郎、木村精一、岸本源三、木村兼孝、實志弘道、三宅碩夫、三浦大之助、三上英雄、宮澤高義、三谷鐵太郎、三根谷實藏、三宅高時、宮崎三郎、鹽谷恒太郎、島野金吾、城田鶴五郎、品川英一、鹽坂雄策、白土幸力、志賀貞次郎、志賀三行、柴田廣吉、樋口竹次郎、廣吉國太郎、樋貝詮三、廣瀬正雄、望月勇、森清、關口專字の諸氏に

して近來稀に見る盛会なりし終りに會計報告は近日中実行委員
会を開きたる上公表する筈なり（実行委員の一人報）